



## 長期休暇の効果

一般財団法人地域社会ライフプラン協会 篠田良子



こ

の4月から改正高年齢者雇用安定法が施行され、段階的に希望者全員を65歳まで雇用することが企業に義務付けられる。定年65歳の時代到来。つい数十年前までの55歳定年と比較すると、10年も延びることになる。

65歳まで勤め上げるとすると、高校卒業後すぐ社会人になったとして47年間、大学卒業後だと43年間も働き続けなければならない。この間、年末年始や夏期休暇はあるにしろ、よほどのことがない限り長期の休みはない。産前産後や育児、介護のための休暇制度は整ったが、自分自身のリフレッシュのために取得できるわけではない。3週間などまとまった休暇を取れる企業はあっても、ごく一部。多くの労働者にとっては、せいぜい1週間がいいところだろう。

週休2日とは言え、40年も50年も休みなく走り続けなければならないと思うと、社会人になるのが嫌になる学生もいるのではないか。“あと何年働かなきゃいけないんだろう”——社会人になって年月を重ねてきた私自身、そう思う。

私は何も仕事が嫌だ、働きたくない、会社に行きたくないと言っているわけではない。仕事は好きだし、自己の成長のためにも生涯現役で働くつもりだ。だからこそ、ずっと働き続けるために、3年に1度、いや、5年に1度でもいい、1カ月くらいのまとまった休暇が欲しいと思う。

1カ月あれば、やりたいこと、できることは増える。なかなか身につけられない語学を短期留学で習得すれば、仕事の幅が広がるだろう。満員電車から解放され山村に滞在すれば、心身がリフレッシュされるだけでなく、過疎地のリアルな現状を身を持って知ることができるだろう。時期が合えば、レタスやリンゴの収穫など農業にも触れてみたい。震災や水害など被災地での

ボランティアも腰を落ち着けて参加できる。これらの経験は、直接ではなくても仕事にプラスになるはずだ。

よく、定年になったら海外旅行に行きたいという話を聞くが、個人的には海外へは若い時に行ったほうが効果的だと思う。インターネットで世界中の情報を得られるようになって、実際現地に行かないと見えないこと、感じられないことは山ほどある。私も現地へ行って初めて、メディアの情報に人の手が加わっていることを実感し、自分が誤解していたことに気づいた。グローバルな視点とまではいかずとも、視野を広げておくことは、その後の人生に役立つ。地元を離れてみる、日常を離れてみることで、見えてくることは多い。

厚生労働省はL休暇のネーミングで長期休暇の普及を進めているようだが、少なくとも私の周りではL休暇導入に向けた動きは見られない。“経済状況が厳しい時に長期休暇などもってのほか”“長期休暇が欲しいなら正社員にならなきゃいい”そんな声も聞こえてきそうだが、会社を辞めなければ長期休暇が取れないような社会は息苦しくないだろうか？

定年を境に、休まず働く「勤労期」とずっと休める「隠居期」に分割されるよりも、定期的にリフレッシュしながらずっと働くほうが、社会全体にとってもメリットは多いような気がする。

労働の長期化の時代、誰もが長く働き続けやすい環境になってくれば、私のライフプランも変わってくるのに…。